

金沢脳神経外科病院 広報誌 | 地域の皆様の「毎日」を支えます。

Kanazawa Neurosurgical Hospital

# Everyday

2017.7

リニューアル  
第1号

今、地域が必要とする医療とは。

広報誌リニューアル記念  
スペシャル対談

野々市市長

栗 貴章

金沢脳神経外科病院 病院長

佐藤 秀次

長年親しまれてきました

金沢脳神経外科病院だより「ふれあい」が、

新しい広報紙「**Everyday**」としてリニューアルいたします。

デザインを一新し、見やすく、親しまれる広報誌を目指します。

地域の皆様の**毎日**がより健康で充実したものになるように

病院の話題や地域の魅力を発信していきます。

## 広報誌リニューアルにあたって

病院長 佐藤 秀次



本院の広報誌「ふれあい」は平成13年1月に第1号が発刊されました。それから既に16年が過ぎ、昨年の秋には64号を重ねるに至りました。この間、「ふれあい」はホームページと並び、本院の広報活動の中心をなし、手前味噌になりますがその役割を十分に果たしてきたと考えております。特に手術を受けられた患者さんからの体験記は、手術を決めかねている患者さんにとって大変心強く、参考になったと伺っております。また、病診連携を推進するために本院と連携関係にある診療所やクリニック、施設などの紹介文も掲載してきました。この企画は今では多くの医療機関が取り入れています。本院が走りであったと認識しております。長い間に渡って「ふれあい」を愛読していただいた患者さんを始め、医療関係各

位には心より感謝申し上げます。

今回から「ふれあい」は、「Everyday」と名称を変更して新たなスタートを切ります。高齢化がピークに達する2025年に向け、医療界は今大きな変革の渦中にあります。新しい時代、すなわち地域包括ケアシステムの時代を迎えるにあたって、本院は脳神経外科専門病院として日々地域の状況にアンテナを張り巡らせ、本院に求められる役割をしっかりと果たしていく所存です。

地域の方々にとって、医療面では「毎日」安心して過ごせる環境が何よりも大切だと思います。この「毎日」という言葉にちなんで、広報誌名を「Everyday」と致しました。今までと変わらず、ご愛読いただけますようお願い致します。





野々市市長

栗 貴章

TAKAAKI AWA

# 今、地域が 医療

多くの商業施設が立ち並び、石川県立大学、金沢工業大学の二つの大学がある野々市市は、20代前後の若年人口が県内で突出しています。しかし3年後には超高齢社会に移行するなど、一方で高齢化も進んでいます。そうした中でこれからの医療にはどんなことが求められるのでしょうか。栗貴章野々市市長と佐藤秀次病院長に語りあっていただきました。

## 「健康寿命」を延ばすために

**佐藤**●平成37年(2025年)に団塊世代が75歳以上となり、医療や介護を必要とする人が今まで以上に増加することが見込まれています。地域医療構想\*が進んでいくなかで、私たち金沢脳神経外科病院が、地域でどんな役割を果たしていくべきかが問われていると思っています。それは市の考え方、あるいは市長ご自身が描かれる医療の将来像と表裏一体のものだと考えています。今日は「地域が必要とする医療」についていろいろ意見交換できればと思っています。よろしく願いいたします。

**栗**●こちらこそよろしく願いいたします。野々市市は、医療的には比較的恵まれた環境にあると思います。市単独で公立の総合病院はありませんが、公立松任中央石川病院を白山市、川北町、野々市市の2市1町で運営していますし、隣接する金沢市は北陸で最も医療機関が密集し、車で10～

20分圏内でたどり着ける距離にあります。市として今後重要なのは、脳卒中のような命にかかわる病気を発症した時にすぐに診ていただける病院です。金沢脳神経外科病院はスピードが命の救急病院の役割を十分果たしておられますし、市民に必要とされている病院だと認識しています。

**佐藤**●脳神経外科には、おっしゃるように命にかかわるような病気がたくさんあります。病気が良くなっても障害が残って、介護が必要となる原因疾患が最も多い分野でもあります。最近「健康寿命」の大切さが言われていますが、私たちの病院は健康寿命にどれだけ貢献できるかが使命だと考えます。脳卒中や足、腰が悪くて充実した生活が送れない方々を、いかにして自立できるようにサポートするか。高齢者の方々の生活の質を上げることに、私たちがどこまでお役に立てるかがとても重要だと思っています。

**栗**●佐藤病院長の講演をお聞きした時に、人が人らしく、長生きをするには健康寿命がいかに大切かを話されたのが印

※) 平成37年(2025年)には、団塊の世代が全て75歳以上となり、医療や介護を必要とする人が増加することが見込まれています。厚生労働省が、同年を見据え、患者の状態に応じた医療機能の分化・連携等を促進し、地域にふさわしい医療提供体制を構築するために策定した医療構想。

金沢脳神経外科病院 病院長

# 佐藤 秀次

SHUJI SATO

## 必要とする とは。



象に残っています。医療の重要性は、施すだけではなく、いかに健康寿命を伸ばすか。何かあった時に信頼できる医療や病院が身近にあり、患者さんと病院が一緒になって健康寿命を延ばす。その考え方は素晴らしいと思います。

**佐藤**●当院が、たとえばパーキンソン病の手術を取り入れているのもその考え方からです。健康寿命を延ばす、生活の質をできるだけ回復する意味で、外科的手術は非常に効果が期待できます。目的はあくまで、多くの患者さんの生活の質を改善することです。長生きしても病気で寝たきりでは喜べません。医学の力で患者さんの喜びや生きがいを、なんとか取り戻すことができないかとも思います。

### 地域と一体で認知症対策

**佐藤**●県内の自治体はどこも高齢化が進んでいて、在宅医療や地域包括ケアなど介護、福祉と結びつけた施策の重要性が高まっています。野々市市はどうなのでしょう？

**粟**●野々市市は若年人口が多いと言われますが、実は高齢化率も年々上昇しています。2015年の国勢調査の結果では18.5%ぐらいだと思います。平均寿命は男女とも県内

トップ。とくに女性の平均寿命は、7年前の数字で恐縮ですが全国の自治体の中で第6位です。平均寿命と健康寿命は違うので一概には言えませんが、データで見ると野々市市は比較的元気なお年寄りが多いと思います。野々市市は「市民協働のまちづくり」を進めていて、たとえば数年前から「コミュニティカフェ」を立ち上げています。各町内会が中心となって、お年寄りや地域の人たちが気楽に集まる場、交流の場として利用されているものです。同じ町内の人たちが自由に集まってお茶や趣味を通じて話をしたり、コミュニケーションを図る。元気で健康なお年寄りが、地域の中で生き生きと交流する場になっていて、市内に16か所あります。市民協働のまちづくりが、健康意識にも繋がっていると感じています。

**佐藤**●いいお話です。私は医療機関もまちと一体であるべきだと感じています。その際、医療機関に何が求められているかを私たちがしっかり把握して、役割を果たしていくことが重要です。高齢化は平均年齢が若い野々市市であっても例外なく進んでいきます。そうなると、これからは認知症の患者さんが否応なく増えていきます。私たちはかなり早くから、認知症とアルツハイマーの早期診断、早期治療に取り



# 安心できる「医療」が、 元気で健康な生活を支える。

組んできました。早期診断、早期治療でできるだけ重症化を防ぎ、歯止めをかける。同時にいかに認知症を防ぐか。こういう問題を市と一緒に取組んでいく必要があると思っています。

## めざすは、認知症サポーター 1万人

**栗**●認知症への備え、対策は重要な施策です。現在、地域包括ケアシステムに基づいて医療機関や在宅、介護施設などとの連携、協力をいただきながら体制構築を進めています。その前提として私が大切にしたいのは、市民一人ひとり



認知症に対して理解をし、思いや情報を共有することです。システムに則って拙速に進めることが、必ずしも良いとは限りません。それぞれの思いや事情を斟酌しながら、どうい

う選択が本人や家族にとっていいのか。地域医療構想では病院の病床数を一律に減らすことを打ち出していますが、その結果として、在宅や施設に丸投げしてしまつては本質的な対策にはなりません。

**佐藤**●そう思います。都会と医療過疎地では医療に対する考え方も事情も違います。私は脳卒中などにより、医療依存度の高い患者さんを数多くみてきます。医療依存度の高い患者さんを在宅でお世話するのは大変です。当院が療養病床を持っているのは、医療依存度の高い重症患者さんを地域で責任もってみていくところが必要だと言う認識に立っています。地域でみていくにあたって急性期、回復期、慢性期の実態にあわせて、それぞれがどんな役割を果たすか。医療と介護、福祉との連携と役割分担が大事になります。

**栗**●野々市市では2年前から「認知症サポーター」の養成に取り組んでいます。市民が市民の相談に乗る市民カウンセラーで、金沢工大の心理学の先生と連携して行っています。将来的に1万人養成を目標にしている、講座を開いて希望者に受講していただき、心理カウンセラーをめざしていただく。受講者は主婦、若者、お年寄りまでさまざま。市はきっかけを作っただけで、運営は基本的に市民の皆さんでと考えています。いずれは自分も近所の人や身近な人のお世話になるかもしれない。その前提に立って、何かお世話できる時にお世話をする。自分で手に負えなくなったら専門の人

や部署につなぐ。そういう役割も含めて活躍していただければと思っています。

### 予防対策が、元気で健康な体をつくる

**佐藤**●脳卒中をいかに予防するかは私たちの大きな使命です。脳卒中はやみくもに発症するわけではなく、高血圧や糖尿病などの生活習慣病と密接に関係しています。私たちは生活習慣病などの不安がある人向けに「脳ドック」を行っています。脳卒中の危険が無いかどうかを診断し、予防対策を講ずることは健康で生きがいのある生活にも直結します。ただ残念ながら、脳ドックは公的な助成がありません。当院では、できるだけ安い価格(26,780円[税込])で受けただけのようにしています。財政的には大変だとは思いますが、もう少し受診しやすくなるためにも、行政の支援があると有難いと思っています。

**栗**●市独自の財源を確保するのはなかなか難しいのが正直なところです。しかし健診の大切さ、必要性は十分、理解



#### PROFILE

**栗 貴章** あわ・たかあき

野々市市長

1960年、石川県野々市町(現・野々市市)生まれ。日本大学法学部卒。石川県議会議員などを経て、2007年6月に野々市町長就任。町長2期目の2011年11月に野々市市に移行し、初代市長に就任。現在、町長時代から通算3期目。



#### PROFILE

**佐藤 秀次** さとう・しゅうじ

金沢脳神経外科病院 病院長

昭和49年、札幌医科大学医学部卒。昭和55年、金沢医科大学病院医学部脳神経外科講師。昭和61年、金沢脳神経外科病院長。医学博士、日本脳神経外科学会指導医・専門医・評議員、日本脊髄外科学会認定医、日本脳卒中学会専門医、日本脳神経外科病院学会理事、日本医師事務作業補助研究会顧問、石川県卒中地域連携推進協議会副会長、加賀脳卒中地域連携協議会顧問

しております。なんとか知恵を絞って実現できるように頑張っていきたいと思います。私はお年寄りが元気で健康な生活を送るためには生きがい、やりがいを持つことが大切だと感じています。元気で健康であれば、何かできる仕事をやっていただきたいですし、行政がその後ろ盾になることも考えたい。その前提になるのは、安心かつ信頼できる医療です。金沢脳神経外科病院には、その要として今後ともぜひお力を貸していただきたいと思っています。

広報誌リニューアル記念  
スペシャル対談

野々市市長

**栗 貴章**

TAKAAKI AWA

金沢脳神経外科病院 病院長

**佐藤 秀次**

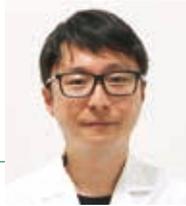
SHUJI SATO

## 新任医師の紹介

脳神経外科部長

### 福島 大輔

ふくしま だいすけ



**前任の病院** 東邦大学  
医療センター大森病院

**専門領域** 脳血管障害(血管内治療、脳血管外科)

**座右の銘** 不撓不屈

### 患者さんへ

金沢出身で、大学から東京の東邦大学で勉強し、大学では血管障害を中心に診療させていただいておりました。石川県では脳血管内カテーテル治療が可能な施設、人材が全国と比較して少ない状況です。当院では4月より最新の血管撮影装置を導入し、すでに何件もの血管内手術を始めております。潜在的に治療が必要な患者さんは多く、今まで必要な治療が受けたくても受けられなかった方々に最適な医療をお届けできればと考えております。

**外来担当** 毎週 月・水曜日 午前

非常勤(大津市民病院在職中)

### 高山 柄哲

たかやま もとひろ



**専門領域** 脊髄脊椎疾患  
(頚椎、腰椎、手足のしびれなど)

**座右の銘** 全ては段取りから

### 患者さんへ

「For the Patient !」

日常臨床をはじめとする、私のすべての診療行動の基本的な考え方は「全ての患者様のために」です。これは、私の恩師である京都大学脳神経外科 宮本亨先生が、臨床活動の旗頭として掲げられたモットーです。

私は、脊髄脊椎外科を専門としております。手足の痛み、しびれ、腰痛、頸部痛などで苦しんでいる患者さんに、少しでも「良い生活」を過ごしていただけるよう、常に患者さんの側にたって診療を行っております。脊髄脊椎疾患は機能的疾患であり、患者さんの症状が良くなるかどうか、痛みやしびれがとれるかどうか全てです。その目的が達成できるよう日々研鑽の毎日です。痛みやしびれでお困りの患者さんは是非、ご来院をいただきたいと存じます。

**外来担当** 第1・3土曜日 午前

## ふれあいコーナー

### 腰部脊柱管狭窄症の手術を受けて 西 彰様(石川県加賀市)

Letter of thanks 1

拝啓、私こと去年9月5日手術をお受けし、9月17日無事退院した者です。なにぶん大正末期生まれの老人ですので、貴病院、諸先生の皆様方にお世話をおかけしまして心からご無礼申し上げます。手術が終わり、「西さん。」と呼ばれハッと目が覚めて、「先生、今から始めますか?」と云ったら、「もう終わったよ」とやさしい佐藤院長先生のお顔が、そして飯田主治医先生のお顔も。「私の仕事は全部無事終わりました。」とのお言葉でした。

まさに夢を見る間もないような間に終わるなんて。今ま

での痛みが嘘のようです。私にとりますと戦後シベリア抑留中に2回ほどの命を授かり、また新たな命を授かったような気分です。貴病院から授かった人生に感謝しながら有意義に送りたいと思います。貴病院の各部門の優秀な諸先生方と貴病院の経営方針が必ず地域の人たちに愛され、そして益々で発展されることを信じますし、その事を心から念じて多きなお世話を頂いたことをお礼とさせていただきます。

敬具



佐藤病院長先生様には、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。上記の際には本当にありがとうございました。長らくのご無沙汰をお許しください。

貴病院だより「ふれあい」が送られ拝読するたびに深い感謝の気持ちをお伝えしたいと思っておりましたが、気がつくとも5年の月日が経ってしまいました。この節目に拙い私の体験をと筆を執らせていただきました。

さて、私は平成23年11月28日、佐藤病院長先生に「腰部脊柱管狭窄症」と「椎間板ヘルニア」をMD法手術で執刀していただきました。あれから5年を過ぎましたが、おかげさまで毎日楽しく暮らしております。特に趣味の旅行、今年は国内で北海道2回、東北・北関東・東京・九州縦断7～14日、国外では6回、中国2回、ベトナム・カンボジア・スペイン・ポルトガル、そして憧れていたエジプト、そして南米（ペルーのリマ・マチュピチュ・クスコ・ブラジルのリオ・アルゼンチンのブエノスアイレス）を訪れることができて、人生？最高を満喫している昨今です。

今振り返ると「腰部脊柱管狭窄症」をはっきりと自覚したのは、現役時代の58歳の時です。東京出張中、新橋で地下鉄の乗換えで通路を歩いていると、突然足が痛くなって歩けなくなりました。いったい何事が起きたのかと頭が真っ白になりました。しかし、しばらく休んでいると歩けるようになり、なんとか仕事を終えて帰宅しました。これはおかしいと思い、すぐに勤務地近くの某整形外科病院に向かいました。MRIなどいろいろと検査の結果「あなたは典型的な腰部脊柱管狭窄症です。」と宣告されました。そのときは落ち込むというよりむしろ病名がはっきりとしたことでほっとしたことを覚えています。そして、血流を良くする薬でしばらく様子を見ましょうということで通院しましたが、4、5ヶ月過ぎても一向に改善しません。5分もたっておれない、夜も痛みでよく眠れないくらいに、むしろ症状は悪

化し始め、目の前が真っ暗状態に陥りました。

その頃、ひどい腰痛で苦しんでおられた隣のHさんが、元気に畑仕事をしている姿を目にしました。私は藁にもすがらる思いでHさんに「どこで治療されたのですか。」と尋ねました。すると「金沢脳神経外科病院（当時は野々市町）の病院長の佐藤先生に手術していただいて、今は全く痛みもないの。」と驚くべき答えが返ってきました。そこで私はすぐに貴病院の佐藤先生に診ていただきたいと予約を入れたのです。検査後、佐藤先生は検査データを見られながら「『腰部脊柱管狭窄症及び椎間板ヘルニア』の計2か所をMD法で手術すれば治ります。」と断言されました。「手術ができる日は、近いところで8月5日しかありません。」ということで、一旦は8月5日に決めました。後日仕事の関係で延期をお願いしたところ、平成23年11月28日になり、当日を迎えました。麻酔をしたところまでは覚えています。痛みで明け方に目が覚めました。看護師さんにその旨を伝え、痛み止めのステロイドの座薬を処方してもらおうと、言葉通り「嘘のように」全く痛みがなくなり、翌日は廊下を歩きまわられました。その後リハビリをして、12月中旬過ぎに退院しました。痛みが続いていた期間、オーバーな表現ですが「人間自由に歩けない人生はおしまい」という感じで、気力もなくなっていました。でも、佐藤先生にMD法で手術していただいたおかげで、世の中がパーッと明るくなったように感じ、今日まで趣味の旅行等を精力的に行えるようになっております。

長々と駄文を綴ってしまいましたが、退職後楽しく充実の日々を送ることができるのも、貴病院の佐藤先生はじめ皆様方の温かい治療があったからと、心から深謝し、お礼申し上げます。本当にありがとうございました。

平成28年12月20日

Thank you!



## いつか必ずこの足で 亡母の思い出の山に登りたい!

松丸 雅子様(東京都大田区)

Letter of thanks 3



拝啓

金沢脳神経外科病院の皆様、ご無沙汰しております。早いもので貴病院で手術を受けて退院してからもう半年近くになります。お礼の手紙を差し上げようと思いつつ日々の仕事に追われ、御礼を申し上げるのがこんなに遅くなり、大変申し訳ございません。

私の場合は腰椎の椎間板ヘルニアが再発し、今年の3月までは毎日、座薬を使って左下肢の坐骨神経痛を何とかしのぎ、5月の佐藤先生の診察を受け、幸いキャンセル待ちで6月に手術の順番をとって頂き、約2週間の入院を経て7月に退院しました。術後、佐藤先生が「脊髄神経の周りにこびりついたヘルニアをぎりぎりまで削ったから、痛みが取れるまでにはしばらく日数がかかるでしょう」とおっしゃった通り、退院後も初回ヘルニア除去手術のようにすぐには痛みが消えず、当時はこのまま一生寝たきりで家族に介護されるのだろうかと思暗澹たる毎日でした。

しかし、退院後2ヶ月過ぎた頃からどんどん痛みが薄らぎ始め、あわせて休職期限が迫っていたため、勤務先の産業医や管理部との面談や手続きであつという間に日にちが過ぎ、10月から念願の復職を果たし、そのまま年末期末の怒涛の業務に追われ、今はフルタイムどころか、休職前と同じく残業に追われる日々で、年末年始休暇に入つてすぐに、なんとインフルエンザにかかり(笑)、今やっと御礼の手紙をしたためている次第です。

本当に4月から8月後半まで左臀部から左下肢への神経痛が酷く、歩くどころか立ち上がることもままならず、毎日、部屋の天井を眺める日々がまるで嘘のようです。今は毎日、電車を2回乗り換えて片道1時間強かけて通勤し、仕事が建築設計なので、時には現場や顧客宅にも出向いています。座業時間が長いので、事務所では膝で座る椅子に座って業務にあたり、顧客宅でソファを勧められると断つて、床に直接座らせて貰って商談しています(笑)。

入院当時、同じ病棟には脳外科の重症患者さんも多数いらっしやいました。私の亡母も2014年に、実家のある四国の病院のエスカレーターから転落し、硬膜下血腫となり意識不明が続き、それでも諦めずに駄目元で母の好きだったチャイコフスキーをiPhoneで聴かせ続けているとあ

る日、突然意識が戻り、そこからは酷いせん妄に悩まされつつもリハビリに励み、あつという間に手押し車で歩けるまでに回復したものの、当時私が初回の腰椎ヘルニア手術の予約を住居地の東京の病院で取るために帰京している間に、母が転院先の病院で再転倒してしまい、帰らぬ人となってしまった経験があり、亡母のためにも意地でも私は歩けるようになってやる!という思いでおりました。

そして現在、私は少し左下肢に違和感はあるもののほぼ以前と同じ日常生活を送ることができるようになりました。本当に、佐藤先生はじめ飯田先生、リハビリの竹田先生そして看護師の方々や医療秘書の方やヘルパーの方々に心より感謝申し上げます。私の勤務先の事務所はビルの14階にあり、坐骨神経痛が発症する以前は好きな山登りのために、毎日通勤時に14階まで歩いて上っていました。亡母も健康な頃は登山好きで、生前のあるときの会話で、87歳だった亡母が毎週3回の透析通院時の透析前の待ち時間でその病院の7階まで歩いて往復しているのを聞き、時間があればビルの階段を登って足腰を鍛えると言う習癖は、若い頃に冒険家の三浦雄一郎さんとも交際があった両親から自然と受け継いだものだったのだなと半ば呆れつつも腑に落ちた気がしました。そして私は年明けの初出勤から再び、最初の週は13階から14階まで、次週は12階から14階までと、1週に1階ずつ階段歩きを再開するつもりです。

そして、いつか両親が愛した北アルプスの山々に再挑戦するのが、亡き両親から残された自分の人生の次の目標です。

本当に半年前はここまで回復できるとは想像もできませんでした。本当に皆様にお世話になりました。ありがとうございました。

そして今、先の見えない闘病に苦しんでおられる方に心よりエールを送りたいと思います。私も何度も何度も折れそうになりました。でも諦めなければ神様はちゃんと導いて下さるのではと思っています。諦めないということを学ばせてもらった今回の闘病でした。

本当にありがとうございました。

敬具

本院は県内で最も多く脳卒中患者さんの治療を行っています。平成27年度の修正DPCデータでは、年間522例の脳卒中患者さんを受け入れ、石川中央医療圏※における脳卒中患者さんの推定シェア率は25～30%に達します。

脳卒中は大きく、脳出血と脳梗塞、くも膜下出血の三つのタイプに分かれます。脳卒中の治療は、先ず診断が大事です。CTやMRIを用いて、脳出血か脳梗塞か、あるいはくも膜下出血かの鑑別診断を行います。診断がいたら、さらにMR血管撮影やヨード造影剤を用いた脳血管撮影を行って原因診断を行います。それから治療へと進みます。治療には薬物治療を中心にした保存治療と手術治療があります。手術治療には、開頭手術と血管内手術があり、後者で今回導入した血管撮影装置が威力を発揮します。



## PHILIPS 社製の高機能血管撮影装置

# Allura Xper FD 20/15 を導入しました。



※石川中央医療圏とは  
一体の区域として、入院医療を提供することが相当である単位として設定するものであり、「金沢市」「白山市」「かほく市」「野々市市」「津幡町」「内灘町」で構成されている。

この装置は脳動脈瘤の塞栓術や脳梗塞超急性期の動脈内血栓回収術に大変適した最新技術が用いられており、使い勝手が良いことから術者の満足度は大変高いとされています。本院ではこの装置をフルに活用して、今まで以上に地域の脳卒中患者さんの救命と機能改善を図って参ります。

さらに、この血管撮影装置による心臓カテーテル検査や治療にも対応できるよう準備を進めています。2016年秋号 (vol.64) の「ふれあい」で述べましたように、虚血性心疾患と脳卒中は併存することが多いことから、両方の専門医が協力して治療できる体制が理想です。これからも「その理想」に向けた取り組みを続けて参ります。

## 平成29年度 入職式と新人研修

新たな年度に変わり、今年も多くの  
新入職員を迎えることとなりました。

- ・脳神経外科医師 …… 1名
- ・看護師 …… 13名
- ・介護福祉士 …… 1名
- ・介護職員 …… 3名
- ・診療放射線技師 …… 1名
- ・管理栄養士 …… 1名
- ・理学療法士 …… 3名
- ・作業療法士 …… 5名
- ・言語聴覚士 …… 3名



の計31名が新たに入職しました。入職式は4月1日に行われ、佐藤病院長からの歓迎の言葉に続き、新入職員代表が決意の言葉を述べました。

入職式が終わり、約1週間の院内研修の後、各部署に配属されました。現在、新入職員の皆さんは部署の先輩たちの指導の下、一人前の医療人となるべく研鑽の日々を過ごしています。



### 病院理念

脳神経外科専門病院として私達は患者の皆様に、  
より高度の医療技術を提供し、公平で平等な患者中心の医療を行います。



日本医療機能評価機構 認定病院

医療法人社団 浅ノ川

金沢脳神経外科病院

〒921-8841 石川県野々市市郷町262-2  
TEL:076-246-5600 FAX:076-246-3914  
<http://www.nouge.net>

金沢脳神経外科病院 広報誌 第65号 発行:広報委員会